

教育事務所だより

令和5年12月4日発行

地域で活躍する頼もしい若者たち

社会教育スタッフ 社会教育主事（兼）調整監 池田 哲也

最近、松江教育事務所管内で社会教育の現場の様子を見て、とても嬉しく、また頼もしく感じることがあります。それは、若者（中高生、大学生）が地域で生き生きと活躍していることです。地域の大人と協力して、地域をよりよくしていく活動に取り組んだり、地域の課題と向き合い、若者の視点から考えた解決策を提案し、実践したりする事例が増えています。新聞等でも取り上げられることがあり、皆さんもいくつかの事例を知っておられるのではないのでしょうか。

このような「若者の地域参画」については、これまで社会教育や地域づくりにとっての大きな課題として様々な取組を行ってきましたが、なかなか進まない状況にありました。進まない理由を関係者に聞くと、以前は「中高生は、部活や勉強で忙しいから暇がない。」とか、「若者が参加してくれない、そもそも若者がいない。」という回答が多く聞かれました。若者に地域活動に関わってもらいたいけど、そもそもそんな若者がいないと捉えられていたのです。

ところが今、地域で活躍する若者がなぜ増えたのでしょうか。その要因の一つは、高等学校の総合的な探究の時間の充実が関係していると考えます。県立高校の探究学習の授業や成果発表会等の様子を見させてもらう機会がありましたが、彼らが探究し、考えたプロジェクトの中には地域の課題に向き合ったものも多くありました。それらは、しっかりと地域に出かけ、調査し、関係者と対話をしたことがうかがえる内容でした。更に、今までにはない新たな視点、発想で解決策が考えられており、実践が楽しみになるものもたくさんありました。実際に実践までに至らなかった事例もあるようなので、今後は、地域側の受け皿を広げていくことも必要だと感じています。

また、これまで小中学校で取り組んできた「ふるさと教育」や公民館等の社会教育事業、青少年健全育成事業の成果でもあると思います。現在、地域で活躍する何人かの若者に話を聞くと、小中学生の時に地域と関わったり、地域のことについて学んだりしたことがきっかけであると答えてくれました。中には、「小中学校までは、密接に地域と関わっていたのに、高校生になって地域とのつながりがなくなるのがもったいない。」と答える若者もいました。地域の中で体験し、地域にどっぷりと浸かる経験を繰り返したことにより、「地域への愛着や誇り」「地域への貢献意欲」が高まっていることを感じます。更に、地域で自分にできることを実行したいと思う若者が着実に増えていることを実感しています。

このように地域で活躍する若者が増えることは、地域にとっては大いに地域活性化につながります。また、若者が、地域活動に取り組むことで、自己の成長を実感したり、社会的責任感を高めたりすることにもつながります。

では、若者がもっとたくさんの地域で活躍できる環境をつくっていくには、どうしたらいいのでしょうか。私は、「ふるさと教育推進事業実施要項」2事業内容（2）市町村の取組②にある「ふるさと教育を発展、補完、深化させる社会教育事業の実施」が1つの方法ではないかと考えています。学校で学んだことを元に、地域でその学びを生かした実践活動が行われるような、学校教育と社会教育が連携・協働した「学びのサイクル」をつくることはできないのでしょうか。これを進めていくためには、今後、コミュニティ・スクールの充実と地域学校協働活動の一体的な推進がポイントとなってくるのではないかと考えています。

公民館と高等学校の連携した取組について

松江市派遣社会教育主事 山田 祐司・林 和博

現在の地域の現状として、小中学生は地域との関わりが比較的多いが、高校生になると関わりが少なくなる傾向があります。そのような中、松江市内の高校では、公民館(地域)とつながったり、公民館を通して小中学生とつながったりしており、公民館で世代間交流が積極的に行われるようになってきています。交流を通して、高校生が地域と関わり、主体的に自分たちができることに取り組む姿や自分で活動を企画し、実践する姿もありました。平成17年から進めてきた「ふるさと教育」が、着実に実を結んできていると高校生の姿からも見る事ができました。このような活動がさらに広がっていくよう支援していきたいと思えます。

【公民館と高校との関わり】

公民館	高校	内容
川津公民館	松江東高校	夏休みの「子どもの居場所づくり事業」で高校生企画イベントを4つ実施。
古志原公民館	松江南高校	松江南高校とのSDGs学習会で、高校生と地域の方が交流しながら学ぶ。
大庭公民館	松江南高校	「おおばてらこや」事業において、小中高大学生と一緒に勉強し、休み時間には地域の方も交流。
大庭公民館	立正大学 淞南高校	毎週月曜日に開催している大庭子ども広場に立正大学淞南高校の生徒が年間通して参加し、児童と交流。



書道パフォーマンスに
チャレンジ!(松江東高校)



松江東高校の内容
はこちらから。
縁 第5号に掲載
しています。



SDGs学習会
(松江南高校)



大庭文化祭の作品づくり
(立正大学淞南高校)

安来市がめざす「コミュニティ・スクール」

安来市派遣社会教育主事 高尾 康弘

全国の学校で、学校運営協議会を設置したコミュニティ・スクールの取組が進んでいます。松江市では昨年度から市内すべての学校がコミュニティ・スクールとなりました。安来市においても今年度から2校のモデル校で3学期に学校運営協議会を開催すべく準備を進めています。

安来市が目指す「コミュニティ・スクール」について

ねらうのは!

【地域とともにある学校】

学校と地域・保護者が知恵を出し合い、力を結集して、子どもたちのために学校をより魅力あるものにしていく話し合いをするところが学校運営協議会です。

今までの取組をさらに補充・強化し、より意義ある学校の応援団をつくっていくことを目指します。

そのために

地域と学校のつながりをより強くしていく動きを!(地域講師等だけでなく、様々な学校支援ボランティアとして学校や子どもと関わる、など)

- ◇ 保護者・地域住民等も教育の当事者になることで、責任感を持ち、積極的に子どもの教育にかかわるように。
- ◇ 保護者・地域住民等と学校が“顔が見える”関係となり、理解と協力を得た学校運営へ。

学校では

子ども: 学びや体験の充実,
自己肯定感の醸成
学校: 社会に開かれた教育課程の実現
学校支援ボランティアの協力などによる
働き方改革の推進にも

地域課題を意
識した「ふるさと
教育」の充実

地域では

目標を共有したより質の高い協働へ、そして
社会総がかりでの教育へ。
⇒地域で活躍できる人づくりへ。
地域の人口減少・高齢化に対応した共育協働
活動の推進

学校、地域の協力を得ながら、意義のある学校運営協議会となるように、教育委員会は、しっかり伴走していきます。

「性の多様性が認められる学校づくり」

～すべての子どもたちが安心して学校生活がおくれるように～

人権教育推進員 野田勝巳

「性的指向及びジェンダーアイデンティティの多様性に関する国民の理解の増進に関する法律」(LGBT理解増進法)が2023年6月に国会で成立し、施行されました。この法律は、性的指向及びジェンダーアイデンティティの多様性を受け入れる精神を涵養し、性的指向及びジェンダーアイデンティティの多様性に寛容な社会の実現に資することを目的としています。

【LGBT理解増進法の主な内容について】(抜粋)

<定義>

「性的指向」・・・恋愛感情または性的感情の対象となる性別についての指向。

「ジェンダーアイデンティティ」・・・自己の属する性別についての認識に関するその同一性の有無または程度に係る意識。

<基本理念>

・全ての国民が、性的指向またはジェンダーアイデンティティにかかわらず、等しく基本的人権を享有するかけがえのない個人として尊重される。

・性的指向及びジェンダーアイデンティティを理由とする不当な差別はあってはならない。

・性的指向及びジェンダーアイデンティティの多様性に関する国民の理解の増進に関する施策は、人格と個性を尊重し合いながら共生する社会の実現に資することを旨として行う。

<事業主等の努力>

・学校の設置者は、基本理念にのっとり、家庭及び地域住民その他の関係者の協力を得つつ、教育または啓発、教育環境の整備、相談の機会の確保等に努める。また、児童生徒の理解の増進に努める。

【学校の取組について】

文部科学省、島根県教育委員会では、学校での性の多様性に対する理解や対応の取組を進めるために下記の資料等を作成しています。

- 「性同一性障害や性的指向・性自認に係る、児童生徒に対するきめ細かな対応等の実施について(教職員向け)」パンフレット 2016年文部科学省
- 生徒指導提要(改訂版)『「性的マイノリティ」に関する課題と対応』の記載 2022年文部科学省
- リーフレット「性の多様性が認められる学校づくり～自分らしさ・その人らしさを大切にする学校づくり～」2020年島根県教育委員会(島根県教育庁人権同和教育課)

これらの資料等を参考にして、性の多様性に関する取組の一部をまとめました。各学校においては、今後さらに性の多様性に関する取組の充実が図られることを願っています。

取組について

- 教職員の理解・・・性の多様性について、研修をおこなうなど教職員の理解を深める。
- 集団づくり・・・いかなる理由でもいじめや差別を許さない適切な生徒指導や人権教育の推進を図る。
- 児童生徒の理解・・・性の多様性について、児童生徒の発達段階に応じて理解の促進に努める。
- 相談体制・・・児童生徒等が気軽に安心して相談できる関係づくりに努める。相談を受けた場合の対応や体制等について全教職員で共通理解を図る。
- 学校生活の各場面での支援・・・服装や更衣室、トイレ等、児童生徒の状況に応じた支援などについて検討する。

特別支援学級の教育課程と教科用図書について

松江市派遣指導主事 梅田 英樹

昨年度の事務所だより第3号で、特別支援学級の教育課程と教科用図書について説明しましたが、今年度学校から提出していただいた学校経営概要の「9. 特別支援学級に関する事項」において、記入事項に説明の捉え違いや記入の仕方の迷いが見受けられました。そこで、多くの訂正をお願いした内容について説明しますので再度ご確認をお願いします。

<教育課程について> (CS:Course of Study「学習指導要領」)

○「教科等を合わせた指導」について合わせるができるのは、特別支援学校の教育課程の教科等※1 (学校経営概要の「CS欄」が「知小①～③, 知中①～②」) 及び自立活動に限定されます。

※1: 小学部: 生活, 国語, 算数, 音楽, 図画工作, 体育, 道徳, 外国語活動

: 中学部: 国語, 社会, 数学, 理科, 音楽, 美術, 保健体育, 職業・家庭, 道徳, 外国語
(「特別支援学校 教育要領・学習指導要領」 P.65 より)

○「小学校CSベース」においては、「児童の実態等を考慮し、指導の効果を高めるため、児童の発達の段階や指導内容の関連性等を踏まえつつ、合科的・関連的な指導を進めること。」(「小学校学習指導要領」 P.21 より)にも留意し、教科のねらいをより効果的に実践する工夫をお願いします。

<教科用図書選定について>

○小学校または中学校CSに基づく教科…該当学年または下学年の検定本を選定してください。

○学校経営概要の「目標内容」を特支CS知的に替えた教科…☆本※2【文部科学省著作教科書(特別支援学校用)】を選定してください。

※2: 小学部用として国語, 算数, 生活, 音楽(各☆1～3), 中学部用として国語, 数学, 音楽(各☆4～5)があります。

○一般図書※3【附則9条本】…検定本, ☆本を使用することが困難な場合に選定を検討してください。

※3: 原則として、一般図書は特別支援学校該当の児童生徒対象とされていますが、それ以外の児童生徒にとっても最適な内容と考えられる一般図書がある場合は、市教育委員会担当までご相談ください。

特別支援教育にかかわる研修会について

安来市派遣指導主事 吾郷 綾子



第2回安来市特別支援教育基礎講座では、指導要録や通知表といった記録に残す評価をテーマに、講義・演習の形で研修を行いました。

知的障がいのある児童生徒に対する教育を行う特別支援学校の各教科における評価においては、文章による記述という考え方を維持しつつ、観点別の学習状況を踏まえた評価を取り入れ、簡潔に文章記述をすることと示されています(「児童生徒の学習評価の在り方について(報告)」(H31.1.21中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会))。「どのように評価し、簡潔に文章記述していくのかについて、具体的に知りたい」という要望があり、松江養護学校相談支援部の5名の先生方に来ていただき、知的障がいのある子どもの評価の実際について講義をしていただきました。後半は、実際の単元計画や日々の記録から、記述評価の仕方について学びました。この研修において、学習指導要領をもとに、年間計画、単元計画を作成し、単元における3観点の目標をもとに、日々の学習記録から評価していくことについて学ぶことができた研修でした。

【参加者の感想より】

- ・文章による評価にいつも苦しんでいました。今回の研修はとてもためになり、2学期からすぐ実践できそうです。
- ・松江養護学校の先生方から、具体的な生活単元学習や日常生活の指導の3観点の評価の例と最終的な文章評価を知ることができ、わかりやすかったです。また、演習もあり、アドバイスをいただきとても役に立ちました。
- ・実際の単元計画や日々の記録を示していただき、そこから具体的な評価の文章を考える活動がとても有意義でした。また、松江養護学校の先生方や他の参加者と共有したりアドバイスをいただけたりして、とてもよかったです。

第3回の基礎講座では、「学びの多様性に応じたユニバーサルデザインの授業づくり」の研修を実施する予定です。

松江の学力育成に向けて

松江市派遣指導主事 丹羽 隆

松江市では、昨年度から3年間「しまねの学力育成プロジェクト事業」に取り組んでいます。2年次の今年度は、「表現力を高める」ための効果的な学力育成モデルを探るべく研究を進めています。

(1)児童生徒の「表現力」を高めること

- ①「対話」や「書くこと」に重点を置いた授業づくり
- ②ICT 機器やデジタル教科書、ドリルソフト等の有効活用
- ③教科の指導内容を高めるための教育施設や、出前授業などの活用

(2)研究指定校での取り組みを「横展開」すること

- ①湖南中学校及び乃木小学校の授業公開と研究協議
- ②学力向上担当者会の実施

松江市立湖南中学校では、10月17日に「自ら挑戦し、協働する生徒の育成-挑戦したくなる学習課題の決定と協働する学びの工夫-」の研究主題の下 4 教科(国・社・数・理)の授業公開が行われ、各校の学力向上担当者と湖南中教員による活発な研究協議が行われました。協働的な学びの中で、生徒が自分の考えを表現する場が意図的に組み込まれている一方で、表現力の高まりをどうとらえるのか、といった課題も浮かび上がりました。

12月1日には、松江市立乃木小学校において、「仲間とともに自ら学び、自分の考えを表現できる乃木っ子の育成」の研究主題の下「対話でつなげる」を切り口として、2学級の授業公開が行われます。公開授業後、各小学校の学力育成担当者と共に研究協議を行う予定です。(本稿執筆時点では未実施)

松江市教育委員会は、2校の貴重な授業実践を横展開して広げつつ、松江市の学力育成をさらに進め、本事業の充実を図っていきます。

学力向上にかかわる研修会について

安来市派遣指導主事 宮廻 繁

9月27日、全国学力・学習状況調査の分析結果の伝達と、『授業と家庭学習をつなぐ』をテーマに安来市学力向上担当者研修を行いました。分析結果で、『自分で計画して家庭学習に取り組んでいる』という項目については平均正答率との相関関係が小中学生の全ての教科で見られました。授業と家庭学習をつなぎ、主体的に学ぶ児童生徒を育成することが大切だと考え、家庭学習のうち特に予習の在り方を検討しました。研修会では深い学びのある授業につなげる予習について、参加者が考えを出し合い、それを有効性と児童生徒の負担感という2つの視点で整理をしました。以下参加者の感想です。

【参加者の感想より】

- ・予習と授業をどうつなげるかということをしつくりと考える時間になりました。生徒の負担もあまり多くなく、持続可能な取組を模索したいと思いました。
- ・家庭学習について、様々なアイデアを知ることができてよかったです。有効性を考えて予習型の家庭学習を実践していけるように、少しずつですが校内で共通理解を図っていきたいです。

家庭学習を復習だけに活用するのではなく、深い学びのある楽しい授業を創るための手段にもしたいと考えています。

〔松江市〕 “つながる” 不登校支援の取組について

松江市派遣指導主事 名目良 美穂

松江市は、年々増加している不登校児童生徒や保護者と “つながる” ことを意識した取組を実施しました。

オンライン学習支援『ボタンねっと』

不登校にある小学6年生から中学3年生の児童生徒を対象に、9月の1ヶ月間『ボタンねっと』を実施しました。参加は自由で、顔出しや声出しは求めません。各教科に興味を湧くような授業、AI型教材による自主学習、屋外からの中継等を行いました。子ども達とリアクションやチャットでのやりとりをし、参加者とのつながりを感じました。今回の取組を検証し、来年度に向けて準備してまいります。



【 朝の会「どげなタイム」 】



【 松江城での中継 】

スクールカウンセラー『相談センター』

夏休み中の5日間、松江市青少年相談室にて、松江市『相談センター』を開設しました。すべて保護者からの申込みで、相談枠の9割の予約が入り、その多くは不登校や特性のある我が子への対応相談でした。学校以外の場所で休日を含めた時間外のSC相談のニーズの高さを実感しました。今後も保護者の声を聴く機会を設定したいと考え、次回は冬休み前後に開設を予定しています。

【 SC (スクールカウンセラー) 】

その他、不登校支援のための資料を作成中です。

不登校児童生徒の学びを止めない、関わり続けることを大事にし、学校と連携しながら取り組んでいきたいと考えています。



生徒指導 (QU) 研修会について

安来市派遣指導主事 村上 陽輔

安来市では今年度からWEBQUを導入しました。これは、児童生徒が各自のタブレットで回答し、最短でその翌日には結果が分かり、学級のタイプ別に適した指導や支援方法が提示される特徴があります。その活用を充実させるために、市内の小中学校のQU担当者を対象に島根大学の川俣理恵准教授をお招きし、研修会を開催しました。

前半の講義にて、QUの基本理論について「児童生徒理解は観察法、面接法、調査法の3つの視点からの見立てを統合的に分析すること」「QU分析の際にはプロットの良し悪しを論じるのではなく、その児童生徒がなぜそこにプロットされたのかに着目し、学校でできる具体的な次の一手を模索すること」を教えていただきました。後半は各校が持参したデータを参加者が各自分析し、その後1つの模擬事例を同じ中学校区の教員で分析し、対応を検討しました。

不登校児童生徒数は全国的な傾向と同じく、安来市でも増加傾向となっています。学校全体で普段の児童生徒観察に引き続き注力し、即時的に客観的データを得ることができるWEBQUを活かしたチーム学校で不登校の未然防止に向けた取組が進むよう伴走していきます。

【参加者の感想より】

- ・プロット図の中の4群に属するそれぞれのタイプ別対応を聞くことができ、とても参考になりました。また1つのプロット図をみんなで共有し、意見を出し合うことの大切さも理解することができました。WEBQUを活かして、よりタイムリーな指導をしたいと思います。
- ・教師のリーダーシップ機能やマズローの欲求階層説と繋げながらの説明でとても分かりやすかったです。また、プロット図の分析だけでなく、個人のレーダーチャートに基づいた支援の仕方なども教えていただいて良かったです。QUについて、例年通り実施し、例年通りプロット図に一喜一憂するルーティーンから脱却し、実施後スピーディに結果が分かるWEBQUを活かし、子どもへの支援を考えたいです。